

# 農業・農業教育の展望を模索している人達が出会った

## 「県農協中央会」と「子どもと住民の立場から

## 高校再編を考える会」の懇談会

去る十月二日、表記の懇談会が県農協中央会でもたれました。県下の農協は県民と国民に食料を安定供給することを担っている新潟県の基幹産業です。農業は同時にその地域の自然環境保全にも深く関わっています。

この農協をたばねる「県農協中央会」を訪ねたのは「子どもと住民の立場から高校再編を考える会」の人たちです。訪ねた目的は県の教育委員会が推進する公立高校の再編の厳しい風にさらされている農業高校の教育の現状を知ってもらい、農業の専門団体として日本の、新潟県の農業をどの様にしたら維持・発展させていけると考えているのか、高校の農業教育の役割をどうみているのか等々をお聞きするためとのことでした。以下、訪ねた側の中の農業教育にたづさわる先生方と中央会の理事の方がたとの懇談の様子をお聞きしました。それを要約してお伝えし、両者が抱えている問題を考えてみました。

日本農業・農業教育の危機が県民に見えないのでは

先生方が農協側に「農業後継者を育成している農業高校に期待しているか」という問いを發しました。

本誌第五七号特集『高校教育の多様化と新潟県の子どもたち』にも掲載された「頑張る農業高校生」の文のはじめに昨年一月十五日NHKホールで長岡農業高校の土田隆君が「青春メッセージ」関東甲信越代表として出場し、全国大会大賞を受賞したことがテレビ等で大きく報じられました。

先生方はこのことやこれらと同じような活躍を全国的に農業高校生がたくさんしていること、また「農業高校の学校農場では稲、野菜、果実、草花が栽培され、牛や鶏、豚などが飼育され、食品加工工場ではそれら農産物がいろんなかたちで加工・製造されていること

等々…二十一世紀のキーワード水・土・微生物の関わりを自らの体験を通じて学ぶことができる「農業高校が人間を育てる上でなくてはならないものであることを伝えながらです。

農協中央会理事はそのことをそのこととしてみると、つつも、県農協中央会が年に一回主催してつもの作文コンクールは農業高校先生方の間で受け止め方に温度差があつて（作文の集まりが悪く？）普通高校にも応募対象をひろげていることを紹介し、後継者問題では農業高校生がみな後継者になるとは限らなくなつていく状況が進行しており、今後も農業を担っていく気持ちでいる四〇歳台の後継者と違つて二〇〜三〇歳台の若い後継者は続けてゆくことを非常に迷つてゐることを紹介しました。

そして県の農業の発展を目指していろいろな努力をしているのだが、自分達だけの力ではどうにもならないところに来てゐる、県民や国民が日本農業の持つさまざまな問題をどのように理解しているのか良くみえない、日本の農業をどうして行きたいのかがきまらないと農協の先行きもはっきりしないという趣旨の発言をされたそうです。

県農協中央会は日本農業が今後発展して行く展望が見いだせないでいるようです。また農業高校はその存在の前提条件・土台がゆらいでいるのですから大変だと思ひます。

- 一 取材後のさらに知りたくなつたこと述べてみます。生産者が見えない地域農業では住民は支援しないのではないか。コシヒカリの新潟だけでいいのか。二 農高教員や県教委、そして農協は県の農業振興プランを県民に分かりやすく提起し、その上に立つた農業と農業教育の「改革」案を示してほしい。
- 三 農業高校以外の高校で生き物を育てる喜びを実感できる教育はできないものだろうか。
- 四 農業高校と地域の農民・食品加工産業とのネットワークづくりはどうなつてゐるのか知りたい。

